

第一章 マジャパヒトの王の系譜

第一章 マジャパヒトの王の系譜

第一節 マジャパヒト初期から Hayam Wuruk まで

〈1〉 マジャパヒトの初代の王が Kertarajasa Jayawardana という戒名を持つ Nararya Sanggramawijaya であることは否定できない。Nararya Sanggramawijaya という名前は普通 Wijaya と省略されている。またよく知られている名前は Raden Wijaya(Wijaya 王子)である。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda で、このマジャパヒト王は Brawijaya と呼ばれている。Brawijaya の名は Wijaya を長くしたものであることは明確である。Bhra/bhre は çri の呼称と同じくその意味は「光」である。Bhra のみならず çri も王の呼称として多く使われている。Brawijaya の名は人口に膾炙している。Wijaya の名はマジャパヒト史を習ったことのある人に知られているだけである。Wijaya 王子は、マジャパヒト軍が元軍を撤退させることに成功したサカ歴 1216 年、西暦 1294 年からサカ歴 1231 年、西暦 1309 年に崩御するまで治世を敷いた。ナガラクレタガマによるとサカ歴 1250 年、西暦 1328 年に Jayanagara、別名 Kala Gemet が Kertarajasa Jayawardana の崩御後に即位したとあるから、ナガラクレタガマから得られる Wijaya 王子が崩御した年は、パララトンや Kidung Rangka Lawe にある 1257 年より信頼できる。〈2〉

ナガラクレタガマによると Jayawardana 王は Dara Petak、別名 Indreswari との婚姻により一人の息子を残した。他に Kertarajasa 王が Tribuwana と Gayatri という名の Kertanagara の姫との婚姻による二人の娘であった。この二人の姫の名前は Bhre Kahuripan と Bhre Daha の名で知られる Tribuwanatunggadewi と Rajadewi Maharajasa であった。サカ歴 1216 年、西暦 1294 年に発出された Gunung Butak 碑文でその名が知られている Jayanagara が、Sidateka 碑文に述べられているように Wiralandagopala という戒名で、サカ歴 1231 年、西暦 1309 年に王位についたのだった。

サカ歴 1250 年、西暦 1328 年に Jayanagara 王は寝台で Tanca に殺害された。その時、Jayanagara 王は浮腫にかかっていた。この病を治すために Tanca が宮殿に呼ばれた。王を刺した後、Tanca は直ちに Gajah Mada に刺された。その後 Gajah Mada は Bhre Kahuripan と Bhre Daha をマジャパヒトの女王に上げた。ここで登場するのは

Jyawisnuwardhani という戒名を持つ Tribuwanatungadewi 姫であるこの bhre Kahuripan は Kertawardana と結婚した。サカ歴 1256 年にこの婚姻から Hayam Wuruk が生まれた。Hayam Wuruk がいつ王位についたかははっきりとは分からない。パララトンのみならずナガラクレタガマでもはっきりとは述べていない。パララトンで伝えられているのは sanga-turanga-paksa-wani(1279)という符牒でサカ歴 1279 年、西暦 1357 年に、Hayam Wuruk 王とスンダの姫 Dyah Pitaloka との結婚への政治行動で Pasunda-Bubat が発生したことである。その時 Hayam Wuruk は 23 歳であった。〈3〉

Hayam Wuruk 王は符牒 medini-rupa-rumeku のサカ歴 1311 年、西暦 1389 年に崩御した。これが Hayam Wuruk 王までの王の名前である。これらの名前はパララトンもナガラクレタガマのみならず「Menuju Puncak Kemegahan」に記したような各種の碑文にも述べられている。換言すると、上記の王の系譜への追加はないということになる。この王の系譜は Serat Kanda と Babad Tanah Jawi とで異なる。Babad Tanah Jawi と Serat Kanda は王と大臣の名前を下表のように与えている。

Babad Tanah Jawi		Serat Kanda	
Raja	Patih	Raja	Patih
Brawijaya	Wahan (Wira)	Brawijaya	Wirun
Prabu Anom	Wahan, Ujung Sabata	Brakumara	Wahan (Wirun), Ujung Sabata
Adaningkung		Aryawijaya	Jayasena; Udara
Hayam Wuruk		Adaningkung	Udara, Logender
Lembu	Demang	Kencana Wungu	Logender
Amisani	Wular	Mertawijaya	Gajah Mada (Setra Kunitir)
Bratanjung			
Raden Alit	Gajah Mada	Angkawijaya	Gajah Mada

Babad Tanah Jawi のみならず Kerat Kanda もマジヤパヒト諸王の治世の年を述べてはいるものの、マジヤパヒトの諸王の系譜は、マジヤパヒト諸王がそのもとになっている碑文の原文からの確認が得られないためここで無視することにする〈4〉

第二節 Adityawarman とマジヤパヒト諸王との関係

パララトンの 24 ページ 25 から 36 行目に、西暦 1284 年において元軍を退けた 10

日後に、サカ歴 1197 年(符牒では resi-sangga-samadhi)、西暦 1275 年に Melayu 国に派遣されていたシンゴサリの軍勢が Dara Jingga と Dara Petak という名の Melayu の姫を二人連れて戻ってきた。Dara Petak 姫は Wijaya 王子の三番目の妃とされた。そのある Dara Jingga は dewa と呼ばれた支配者の一人と結婚し、その後、戒名で Raja Mantrolot と呼ばれた Tuhanku Janaka という名の Melayu 王を生んだ。Wijaya 王子はサカ歴 1216 年(符牒では rasa rupa-dwi-çitangçu)、西暦 1294 年に王に即位した。Dara Petak 姫との間には Kala Gemet 王子が生まれた。Kertanegara 王の王女との間には bhre Kahuripan と Bhre Daha の二人の姫が生まれた。

このパラトンを源とする話は、Kidung Panji Wijayakrama の第 7 節 147-150 項の話と同じである。ここにも、列島に以前に派遣された軍勢が、財宝と Dara Jingga と Dara Petak の姉妹の姫を連れて帰ってきたと述べられている。妹の Dara Petak は王の妻となった。姉の Dara Jingga(alaki dewa)は dewa という支配者の一人と結婚した。Dara Jingga 姫は、宮廷内で stri tinuhaneng pura という名の第一夫人に取り上げられた。

ナガラクレタガマ第 47 節 2 項で、Jayanagara 王の母が Indreswati であるとの説明を得た。Dara Petak 姫はマジャパヒトの都で Indreswati と呼ばれていたことがここではっきりした。

Kidung Panji Wijayakrama のみならずパラトンでもはっきりと Dara Jingga 姫が Melayu 国からマジャパヒトに連れてこられたと語っている。〈5〉しかし、Dara Jingga 姫は Wijaya 王子の妻にされたのでなかった。Dara Jingga は alaki dewa になったことがはっきり言える。Dara Jingga が Melayu 国出身でジャワに連れてこられたことから、Dara Jingga が Melayu 王と結婚させられたのではないことが確実である。その当時 Melayu の国王になっていたのは彼女たちの父である Tribuwanaraja Mauliwarmadewa であった。この王は Dara Jingga と Dara Petak 姫がマジャパヒトに連れて行かれた六年前に不空羂索観音像を Kertanegara 王から 1286 年に受け取った王であった。Dara Jingga と Dara Petak 姫は Dharmaçraya(度欲註:西スマトラ州のパダンとジャンビ州のムアラブンゴの中間で Batang Hari の上流部地域)あるいは Melayu 国の Tribuwana Mauliwarmadewa の姫であると言えるのである。この dewa を意味する人はいったい誰であったかとい疑問がここで出てくるのである。Dara Jingga 姫は、戒名

Mantrollo である Melayu 国の Tuhanku Janaka の子孫であるとパララトンでははっきりと述べている。Melayu の王になるために Dharmacraya Tribuwana Mauliwarmadewa 王と系図で関係を有することが必要であった。明確なのは Dara Jingga 姫は Tribuwana Mauliwarmadewa 王の王女であったことである。Dara Jingga の夫はだれであったかという疑問がまだ残っているとしてもである。

1325 年と 1332 年の元王朝の元史によると、Sengk'ia-lie-yu-an という名の高官の使節がジャワから中国へあった。この年代は Jayanagara と Tribuwanatungadewi Jayawisnuwardhani の治世からは離れている。このジャワからの大臣の名は Adityawarman であろうと思われる。Adityawarman はマジャパヒトの都で育った。1339 年に初めて Adityawarman はスマトラに出かけ Minangkabau 王国を建国した。その時 Adityawarman は約 45 歳であった。この年齢は 1294 年に続いた Dara Petak 姫と Wijaya 王子の婚姻の時期をもとに計算したものである。Dara Jingga 姫は”sira alaki dewa”であった。Adityawarman は Jayanagara と同じ年であったといえる。パララトンでは話題となっている歴史上の人物の名を幼名あるいはあだ名で呼ぶことは普通になっている。〈6〉パララトンでは Adityawarman は Tuhanku Janaka と呼ばれている。はっきりしているのは Tuhanku Janaka あるいは Adityawarman とは Jayanagara 王が母方のいとこ同士であるということである。一方は Dara Jingga の子孫で他方は Dara Petak の子孫である。このような血縁関係からマジャパヒトの都にいた Adityawarman が最高位に上り詰めることができた、そして二回も王の使者として行動できたことが理解できるのである。注意すべきは Jayanagara 王が Kertarajasa Jayawarman の王子として対岸の王女から生まれたことである。Dara Petak 姫、別名 Indreswati は王の妃の中でも最高位を奪うことに成功し、Gayatri や Tribuwana というシンゴサリ出身の Kertanagara 王の王女たちを打ち負かしたのだった。いずれにせよ、Jayanagara はマジャパヒトの王宮で Jawa-Melau の混血であった。彼は自分の地位を固めるため、このいとこを高い地位に上げたのであった。

Adityawarman という人物に関していくつかの説がある。W.F. Stutterheim は T.B.G 76 の論文で、Kertanagara 王の命令で 1286 年に不空羂索観音像を返礼として輸送したのは、Wiçwarûpakumāra と Melayu の姫との婚姻の返礼として行われたものだと発表した。Stutterhiem によると、Wiçwarûpakumāra は Kertanagara 王の親戚である。

この婚姻から Adityawarman が誕生した。このように Gayatri 姫と Adityawarman はいとこ同士であったのだ。

De Sadeng-oorlog en de mythe van groot Majapahit<度欲註:大マジャパヒトの Sadeng 戦争と神話>という論文で、Dara Jingga 姫は Kertanagara 王の王女であるといういろいろな説を発表することで、Adityawarman の系譜について Berg 教授は長広舌をふるっている。Dara Jingga 姫は Sanggramawijaya 王子、別名 Kertarajasa Jayawardana と結婚しその後、Melayu の Mauliwarmadewa と結婚した。この婚姻から Arya Damar¹別名 Adityawarman が生まれた。〈7〉Adityawarman は初代のマジャパヒト王 Kertarajasa Jayawardana の末の王子であった。それ故、彼の地位は Jayanagara よりはるかに低かった。Berg は dara Jingga 姫と結婚した Melayu 王は Wiçwarûpakumâra であったという説を唱えた。それ故、Stutterheim の説とはまるで逆である。

この Berg の説は Kidung Panji Wijakrama とパララトンの記述と矛盾する。これらの二つの史料は Dara Jingga 姫と Dara Petak 姫は、王に貢ぐために Melayu 国に派遣されたシンゴサリの軍勢によって連れてこられた Melayu 国の姫たちであったと述べている。Dara Petak は Wijaya 王子の妃として取り上げられ、一方 Dara Jingga に関しては”sira alaki dewa”と言われており、現在に至るまでその意味はまるで暗闇のままである。それ故、たくさんの解釈が発生したのである。Berg は Adityawarman が Wiçwarûpakumâra が Melayu の姫との結婚で生まれたという説をずっと唱えている。Adityawarman の血筋に関する Berg の論文のみならず Stutterheim の論文も極めて曲がりくねっておりいろいろな説に関連して極めて高いのである。この件はここで再び説明する必要がない。この件に関して知りたい人は誰でも T.B.G. 76 と Indonesië V 年版にある論文を読むことができるからである。

ここで Adityawarman の声明に注目しよう。この声明は Adutyawarman 王の墓石に彫られたとてもこんがらかったサンスクリット語で書かれた碑文に読み取れる。O.J.O CXXIII あるいは V.G. (Kern) VII 213-221 ページ参照のこと。この碑文の最初の部分は、Adwayawarmamputra Kana-kanedinindra と読み、その意味は「Suwarnadwipa の

¹ Arya Damar と Adutyawarman との同定は無理である。Arya Damar あるいは Arya Dilah は、中国の姫 Ni Raseksi から生まれた Wikramawardana の王子である。中国名は Swan Liong である。かれは 1443 年にパレンバンの中華商館長になった。

王 Adwayawarman の息子」である。11～13 行目には Adityawarmambûpala Kuliçadhara-wamça と読め、Adityawarman 王は Kuliçadhara 王族(帝釈天)出身であるとある。以上のように、Adityawarman は Kertarajasa Jayawardhana あるいは Wiçwaru-pakûmâra の息子ではなく Adwayawarman の息子であると述べていることは明らかである。問題になるのは Adwayawarman とはいったい誰であるかということである。Adwayawarman とマジヤパヒトとの関係はどうであったのか?というのは Adityawarman は幼少時にマジヤパヒトの都で育ったからである。



ここで、サカ歴 1278 年に発出された Pagaruyung 碑文(度欲註:西スマトラ州 Tanah datar 県、山間部で現在のマレーシア国王の出身地)としても知られている O.J.O. CXXII と V.G. (Kern VI, 265～275 ページ)の Bukit Gombok 碑文に注目してみよう。この碑文の最初の行にも Adityawarman 王と関係する Adwayadwaja の名が述べられている。いずれにせよ、Adwaya は Adityawarman の父である。シンゴサリから Suwarnabhumi へ不空羂索観音像を届けたシンゴサリの高官の中に、Adwayabrahma という宮中の長官がいた。この名前は不空羂索観音像碑文に刻まれていることは確かである。その時、Melayu

国の国王になったのは çrimat Tribuwanaraja Mauliwarmadewa であった。シンゴサリから Suwarnadwipa への不空羂索観音像の輸送は 1286 年に行われた。Adityawarman 自身が Adwaya(warman)の息子であると述べていることから、Dara Jingga はシンゴサリの Adwaya という宮中の長官と結婚したと結論付けることができる。以上のように、Dara Jingga alaki dewa という文章は Dara Jingga 姫はシンゴサリの高官 Adwaya と結婚したと解釈できる。言い換えると宮中の長官 Adwaya は Dharmacraya 王 çrimat Tribuwanaraja Mauliwarmadewa の婿養子であったのである。

Adityawarman は自分の父親が Suwarnabhumi 別称 Kanakamedini あるいは黄金の島の Dharmacraya の王であったとは述べていない。パララトンでも Dara Jingga は王と

結婚したとは述べていない。パララトンで述べているのはDara Jingga 姫が”alaki dewa”であり、Melayu 王の Tuhanku Janaka、戒名は Mantrolot という Warmadewa を退位させたということである。確かに Adityawarman の本名は不空羅索觀音像碑文で知られているように、Udayādityawarman Pratâpaparâkramarâjendra Mauliwarmadewa である。Bukit Gombok 碑文に刻まれているようにその本名は çrimat çriayādityawarmma prâtapaparâkrama râjendra molimaniwarmmadewa mahârâjadhira である。〈9〉彼は Dharmaçraya の王 Tribuwananaraja Mauliwarmadewa の孫にあたるので、mauliwarmadewa の名を使ったのであった。

上述のように、Adityawarman と Jayanagara は母方のいとこ同士であった。一人は Dara Jingga の、他方は Dara Petak の息子であった。宮廷の長官は普通王と親しい親戚関係を有する人であるから、父方からみてもかれらもまたきわめて緊密な家族関係にあったことは間違いない。Kertanagara 王の治世に、Nararya Sanggramawijaya は王のいとこの息子であり、Sanggramawijaya は Kertanagara 王に仕え、その後軍司令官に取り上げられた。Adwaya は宮廷の長官になった。Kertanagara 王が発出した碑文には、宮廷長官 Hiro, Sirikan, Halu の名が述べられていないのが極めて残念である。Panampihan 碑文のみならず Gunung Butak 碑文でも宮廷長官の Katrini の名が述べられていない。後日 Indreswati のという名を受けた Dara Petak 姫は Kertarajasa Jayawardhana 王の寵愛を受けるのに長けていた。Adityawarman が Dara Petak 姫の甥で Jayanagara 王のいとことして王の側からはよい評価を受けたことは確かである。王の死後、Jayanagara は後継者として王位に上った。マジャパヒトの都において Adityawarman のみならず Jayanagara も Jawa と隣国の混血であったが故に、彼らはいとこ同士の助け合いを重要視していたのだった。いずれにせよ、Jayanagara は Kertanagara の二人の王女たちの側からの暴動の発生の可能性に直面していたのであった。Bhre Kahuirpan と Bhre Daha を求めるすべての青年たちを遠ざけたいと願っていた。

1339 年になって初めて Adityawarman はスマトラに出発し、Minangkabau 王国を建国した。このように元の三仏齊王国に、Dharmaçraya、Palembang と Mintangkabau の三カ国の王国が生まれた。Adityawarman が来島する前は古い Melayu と Siritiwijaya 王国の続きの Dharmaçraya と Palembang の二つの王国があっただけであった。〈10〉

三王国の存在は明史のなかで強調されている。明史は Melayu と三仏齊王国とを区別している。三仏齊王国を意図するものは元スリウィジャヤ王国であった Palembang である。Melayu 王国を意図するのは Dharmasraya にその中心地を置く Jambi 地域の王国であった。1371 年に Melayu 国は中国に使節を送った。この使節は孔雀と樽、金の板に書かれた一通の書簡を持参した。1373 年に三仏齊からの使者が来訪した。この使節を派遣した王は Ta-ma-cha-na-a-cho(怛麻沙那阿者)と称号していた。この使節は三仏齊王国が分裂して三カ国になったと報告している。



続く朝貢使節から、三仏齊は崩壊して Dharmasraya(Melayu)と Palembang、Minangkabau となったと報告している。1374 年に Ma-na-ha Po-lin-Pang (Maharara Palembang)が来朝した。その翌年の 1375 年には Seng-kia-lie-yu-an (Minangkabau

王国の Sang Adityawarman) が来朝した。この名前は 1325 年と 1332 年にジャワ(マジャパヒト)からの使者である高官の名前と同一である。1376 年には Melayu 国王が崩御し Ma-na-cho Wu-li (Maharaja Mauli) が即位した。その正確な名こそわからないが、Dharmaçraya の諸王が輩出した Mauli 王族に含まれることははっきりしている。その翌年には Mauli 王が、keswari 鳥、孔雀、白猿、鼈甲などを持参して中国に使節を送った。使節は皇帝に Maharaja Mauli に対して書状を出してもらうように依頼した。しかしながら、帰路の途上で使節団はジャワの軍勢に捕まってしまった。その時、三仏齊はジャワによる征服の最終段階であり、その後国名が古い港あるいは古い河を意味する Chiu-chiang[旧港=舊港]に変わった。瀛涯勝覧では、旧港とは以前三仏齊と名乗っていた国と同じであると述べている。またそれは寶林邦(Palembang)とも呼ばれる。

<11>

上記のように、高官 Adwaya と Dara Jingga の間に生まれマジャパヒトの都で育った Adityawarman は先祖が支配していた Dharmaçraya の王になることができなかった。Melayu Dharmaçraya 王国には Tribuwanaraja Mauliwarmadewa の子孫の王が既にいたのであった。Adityawarman は Pagaruyung に新しい王国を建てたのだった。これで Adityawarman とマジャパヒトの都との関係がはっきりしたとおもう。

1286 年には Dharmaçraya は、1275 年に Kertanagara 王が派遣したシンゴサリの軍勢の支配から離れていたということは否定できない。この軍の遠征は Pamalayu という名で知られている。シンゴサリの軍勢は Batang Hari (Hari 川) を通って Dharmaçraya 地域に入ったと決定することができる。換言すれば、Batang Hari の上流に位置する Dharmaçraya に達する以前に、現在 Jambi 市となっている Batang Hari の河口に位置した Melayu 港をまず奪取したことになる。このような方法でシンゴサリの軍勢はマラッカ海峡の交通を支配したのであった。その当時マラッカ海峡を航行するにはスマトラ東海岸沿いのルートを取っていた。Dharmaçraya の産物である胡椒は Batang Hari を通って Jambi の Melayu 港に運ばれていた。

1128 年以降、Kampar Kanan 川と Kampar Kiri 川の胡椒生産地域(度欲註: Pekan baru 市の西側、Kampar は英語で樟腦を意味する camphor の語源)を支配しようとする Perlak (度欲註:アチェの Lhoksmawe と Langsa の間)と Pasai (度欲註:アチェの Lhoksmawe 付近)の河口を中心地としていた外国の商人たちの努力があった。この

外国商人たちはイスラム・シーア(Syi' ah)派を奉じていたエジプトのファーティマ(Fathimia)朝がスポンサーになっていた。1168年まで、同地域はファーティマ朝の支配下にあった。イスラム・シャフィー(Syafi' i)派である Salahuddin の軍勢によってファーティマ朝が壊滅した時、Kampar Kiri 川と Kampar Kanan 川地域におけるファーティマ朝の支配は Dharmaçraya の軍勢によって奪取された。その影響で、Minangkabau 全域にわたる胡椒は Dharmaçraya 王の手中に落ちた。シンゴサリの軍勢が Dharmaçraya を支配した後、この胡椒の産地はシンゴサリ王国の支配下にはいっただけだった。〈12〉

ヒンドゥー教徒のジャワの軍勢とイスラム教徒のスマトラ東海岸の軍勢との間の胡椒産地の取り合いはまだ続いていた。1299年に Malikul Mansur が建国した Aru/Barumun サルタン国は 1301年に Kuntu/Kampar 地域を取り戻した。マジャパヒトから Dharmaçraya への軍隊の派遣は、その当時 Sanggramawijaya がシンゴサリの後継としてマジャパヒト王国を建国するのに忙しかつたため、引きずられていた。Sanggramawijaya は Kediri と元軍との戦闘から解放されたばかりであった。この戦争は 1294年に終了したばかりであった。Kuntu/Kmpar は Aru/Barumun サルタン国の属国となった。

1292年のシンゴサリ王国の滅亡と Sanggramawijaya に率いられたマジャパヒト国の建国の初期の混乱は対岸(度欲註:スマトラ)地域での属国の地位に対する影響を有していた。パララトンのみならず Kidung Panji Wijayakrama でも Melayu 国に派遣された軍勢が 1294年に Mahisa Anabrang に率いられて帰還したと述べている。シンゴサリの軍勢の一部は本体から離れて Dharmaçraya 地域に駐屯していた。Kuntu/Kampar の胡椒生産地は Aru/Barumun の支配に落ちた。シンゴサリの軍勢は降伏せざるを得なかったのであった。

Asahan 川の河口(度欲註: Tanjung Balai)の前線にいた司令官 Indrawarman²はシンゴサリの後継者であるマジャパヒトの支配権を認めなかった。Indrawarman という人物はパララトンでもナガラクレタガマでも Kidung Panji Wijayakrama でも Kidung Harsyawijaya でも述べられたことがない。Indrawarman という人物は Simalungun(度欲註:北スマトラのメダンからトバ湖までを含む広い地域)のバタック人たちの間の物語

² Indrawarman については Tuanku Rao の添付 15 参照のこと

の中で生きており、Simalungun 地域の Hindu-Jawa 王国と関係し、歴史上の人物である Jaka Dolog と関連している。〈13〉Parlindungan 氏によれば、Kertanagara の名は Karo/Simalungun のバタック人たちの間では知られていないそうである。彼らの伝説で民衆に知られているのは Jaka Dolog である。Jaka Dolog とはシンゴサリの Kertanagara 王の名である。この Indrawarman に関する伝説は、Simalungun 地域の Hindu/Jawa 王国の歴史研究の材料として利用するために Sutan Martuaraja が蒐集している。Indrawarman とはシンゴサリの Jaka Dolog によって派遣された軍司令官であると語っている。上記の伝説は 1275 年の Pamalayu の軍遠征および 1286 年の Melayu 国でのシンゴサリ軍の駐留と関係を有することは確実である。1286 年に Kertanagara 王は Dharmaçraya 王に不空罽索観音像を褒賞として与えた。この仏像は高官 Adwaya(warman)の指揮下でシンゴサリの支配者たちによって輸送された。Indrawarman とは不空罽索観音像の輸送に同伴した支配者のひとりであったことは不可能であるとは言えない。

Indrawarman に関する Sutan Martuaraja の理論は以下のとおりである。

1. シンゴサリの軍勢が 1275 年に Melayu 国に派遣されたのは事実である。シンゴサリの軍勢は Minangkabau 東部地域の Sungai Daren の胡椒産地を支配するために Dharmaçraya/Jambi 王国を奪うことに成功した。
2. Pasai 川河口域のイスラム派に対する Pamalayu 遠征の結果を保持するため、Indrawarman に率いられたシンゴサリの軍勢の一部を Asahan 川の河口に駐留させた。
3. 1293 年に Indrawarman 司令官は、シンゴサリ王国に代わるマジャパヒト王国への服従を快しとしなかった。したがって Indrawarman 指令官はマジャパヒトの威嚇から逃れるために Simalungun の内陸部奥地に Silo 王国を建国した。
4. Gajah Mada が宰相であった 1331-1364 年³にマジャパヒトの軍勢は Minangkabau 地域に Pagaruyung 王国を建国し Simalungun の Silo 王国を殲滅した。

シンゴサリ王国の滅亡とマジャパヒト王国建国初期の混乱の影響で、対岸(度欲註:スマトラ)の属国は Kertanagara 王の治世下におけるシンゴサリ王国との主従関係から

³ 1364 年ではなく 1336 年である

解放するためとシンゴサリ王国の後継者としてのマジャパヒトの支配、さらには Gajah Mada 宰相が述べた「列島の誓い」が存在したことがその証拠としてあげられる。マジャパヒト王国は支配地域の拡大を再度始めなければならなかった。この準備は 1294 年から 1336 年までの 40 年間の期間を要した。この時代はマジャパヒトの行政を固める時期であった。

Gajah Mada 宰相の指揮下でマジャパヒト王国が強国になった後、列島地域でのマジャパヒトの支配領域を広げるための理想が登場した。Tribuwanatungadewi Jayawisnuwardhani 女王の面前でサカ歴 1258 年、西暦 1336 年に「列島の誓い」と呼ばれる政策を Gajah Mada 宰相が公表したものである。この「列島の誓い」はこのように言っている。”Lamun huwus kalah nusantara, isun amukti palapa; lamun kalah ring Gurun, ring Seran, ring Tanjungpura, ring Harum ring Pahang, Dompo, ring Bali, Sunda, Palembang, Tumasik, samana isun amukti palapa”。この意味は「列島が服従した時私は初めて休息する。Gurun (ロンボク)、Seran (Seram)、Tanjungpura (カリマンタン)、Haru (北スマトラ)、Pahang(マレーシア)、Dompo、バリ、スンダ、パレンバン、Tumasik(シンガポール)が服従した時私が休息するときである」。

この「列島の誓い」に関連して、Adwaya の息子である Adityawarman が Dara Jingga 姫と結婚して 1339 年に、Aru/Barumun サルタン国からのイスラム軍に支配され、Aru の帰属地域になった Minangkabau の胡椒の産地を奪回するためにスマトラに派遣されたのだった。このようにこの Adityawarman のスマトラへの出立とは「列島の誓い」として知られている政策の実施の一環であった。

Adityawarman の指揮の下マジャパヒトの軍勢は Kuntu/Kampar サルタン国を奪うことに成功した。ナガラクレタガマの第 13 節 1 項にははっきりとマジャパヒトの支配下に服した地域である Jambi、Palembang、Toba、Dharmāçraya、kandis、Kahwas、Minangkabau、Siak、Rikan、Kampar、Panai、Kampai、Haru あるいは Mandailing、Tumihang、Perlak、Samudera、Lamri、Batan、Lampung、Barus のスマトラの地名が述べられている。この「服従」という語は広義に解釈できる。これらの全地域がマジャパヒトの軍勢に征服されたのではない。Samudera/Pasai を征服するためのマジャパヒトの行動は成功しなかったのである。Wampu 河口(度欲註:メダン西北部の川)に位置し、Batak/Kari Pagan 王国を形成していた Haru 王国は 1339 年に征服できたのであった。Aru/Barumun サルタン国地域の一部である Panai も征服できたのであった。いずれ

にせよスマトラ島のマジャパヒトの軍勢が支配した地域は広すぎたのであった。

Kuntu/Kampar 地域が Aru/Barumun サルタンに支配されていた 1301 年から 1339 年までの間、この地域は属国のサルタン領になっていた。これらの地域を経営する権利を持たされた下位のサルタンは Perkasa Alam と称号していた。この称号は、この称号を持つ者は Mahkota Alam を称号する上位の政府の下にいたことを示している。この下位のサルタンは、Said Amanullah Perkasa Alam, Rasyid Perkasa Alam, Ibrahim Seleh Perkasa Alam, Jiahn Alim Perkasa Alam であった。彼らはイスラム Syi' ah 派を奉じる Aru/Barumun サルタン国の属国の支配者であった。⁴知ってのとおり、Aru/Barumun サルタン国は Malikul Mansur によって 1299 年に建国されたものである。

この西側に接する地域へのマジャパヒトの遠征は Gajah Mada 宰相自身の指揮により大々的に行われたようである。ナガラクレタガマとパララトンにはスマトラ諸地域を征服するために 1339 年に行われた遠征について一切書かれていない。パララトンと Kitab Sundayana から、1359 年に Gajah Mada 宰相はスダ軍に対する Bubad の戦いを指揮したことが知られる。Gajah Mada 宰相がスマトラ遠征を指揮したことは北スマトラの諸地域の地名に関連する民話に語られている。Samudera/Pasai に対する攻撃は失敗の憂き目を見た。⁵

Gajah Mada が Samudera/pasai イスラム国の征服に失敗したことはマジャパヒトの支配に対する Adityawarman の反抗の原因となった。Adityawarman が 1339 年に Kuntu/Kampar サルタン国を奪うことに成功した後、Maharaja Adiraja を称号する *çrimat Udayadityawarman* あるいは Adityawarmodaya の名で Pagaruyung(度欲註:原文にある Pagarruyung の綴りは間違い)に新しい王国を建国した。Adityawarman は二度とマジャパヒト王には服属しなかった。彼は Kuliçadhara 別名 Indera 王朝と呼ばれる新しい王朝を作った。⁶Adityawarman は 1376 年まで統治した。Adityawarman は 1328 年に Dharmaputra Tanca の刺殺事件で殺された Jayanegara 王のいとこであることを知っておく必要がある。Tribuwanatunggadewi Jayawisnuwardani と Bhre Daha を女

⁴ Tuanku Rao 510-511 ページ

⁵ Zainuddin 著 Tarikh Aceh dan Nusantara, 第 17 章「Ekspedisi Majapahit=マジャパヒトの遠征」220-236。この論文の一部は「Negara Islam ynag Tertua di Nusantara = インドネシア最古のイスラム国」の第 3 章から引用している。

⁶ Adityawarman 墓地碑文、O.J.O. CXXIII あるいは V.G. (Kern) 213-221 ページ、11-13 行

王に推挙した Gajah Mada 大臣が登場して以来、マジヤパヒト人の同情は Kertanegara 王の子孫に注がれた。このことで Tribuwana と Gayatri 姫を大きな競争相手とする Dara Petak あるいは Indreswati の地位は脅かされたのだった。Dara Jingga と Dara Petak の子孫へのマジヤパヒト人の同情は減少した。マジヤパヒト王と Adityawarman との関係は親密でなくなった。Kuntu/Kampar 地域の支配と Samudera/Pasai サルタン国征服の Gajah Mada の失敗は、マジヤパヒトとの連携を解消する決心を強化したのであった。

1409 年にマジヤパヒト王は Kanakmedini、Swarnabumi あるいは黄金島、さらには Malayapura と呼ばれた Adityawarman 王国を奪うために遠征軍を送った。⁷その都は Batu Sangkar であった。当時マジヤパヒトを統治していたのは Wikramawardana 別名 Hyang Wisesa であった。マジヤパヒトと Pagruyung 軍の衝突は Padang Sibusuk⁸で燃え上がった。マジヤパヒト軍は敗走した。とはいえ、Pagaruyung の都はその時にイスラム Syi'ah 派を奉じる民族派の攻撃を受けた。Kuliçadhara 王朝を壊滅させることはできなかったが、彼らは復讐したのであった。実際に、中央行政機構は麻痺してしまった。支配はいくつにも分断され Syi'ah 派を奉じる民族派の手中に落ちた。1513 年以降、この地の支配権は Burhanudin Syah とのいう名の Aceh のサルタンの王子によって再統一された。Burhanudin Syah は Pariaman の Syahbandar となった。Pariaman 港からの胡椒の輸出の必要性から Burhadudin Syah は民衆の支持があるイスラム Syi'ah 派を発展させた。これ以降 Adityawarman が建国した Kuliçadhara 朝の支配は消滅したのであった。

1339 年のマジヤパヒト軍の遠征はマジヤパヒトの支配を認めない Indrawarman に懲罰を与えたものであった。最終的にマジヤパヒトが来たとはいえ、マジヤパヒトの脅威を避けるために Indrawarman は Asahan 河口から Simalungun の奥地に移動し、その後 Simalungun に Silo 王国という名の Hindu-Jawa 王国を建てた。〈18〉Dolok 王の援助で Silo Sutan Martuaraja は、Indrawarman に率いられた Simalungun の Hindu-Jawa 王国があったことに関してすでに民話となっていた多数の史料を収集することができた。明史にある三仏齊の歴史では確かに Sri Indrawarman の名が述べられている。これに続く解説がないためその名は特に注目を引かなかった。この Silo 王国の

⁷Adityawarman 発出の不空羅索観音像碑文

⁸ Tuanku Rao 124, 510 ページ

Indrawarman の名は中国の明史にある Sri Indrawarman と同じである。上記の Hindu-Jawa 王国の存在がバタック地域に古代ジャワの言葉と文化を浸透させたことについての説明を与えるため、この Simalungun の Hindu-Jawa 王国の史料は実に注目を引くものである。言語の問題中で、上記の多数の要素がバタック語に紛れ込んでおり、今まで行うべき解説をされたことがない。今回初めて上記の件を解説できるのである。

ジャワ島におけるマジャパヒトの支配を認めようとしなかった Indrawarman は Asahan 河口を軍勢と共に出て Simalungun の奥地に入った。その当時、Silo 川と Bah Belon 川の間地域には Lottung/東 Samosir 出自の Siregar/Silo 一族からなる人たちが住んでいた。この Siregar 一族の人々は、後から同じように東 Samosir からやってきた Sinaga 一族に圧迫されていた。その影響で、Simalungun の奥地に入ってきた Hindu-Jawa の軍勢による保護を彼らは望んでいた。Siregar 一族の人たちの協力により、Indrawarman は Simalungun 地域で最初の王国として Silo 王国を建てた。その港は王と同じ名の Indrapura で Bah Belon の河口であった。そこの住民達の宗教は Hindu-Jawa であった。Indrawarman に同行したジャワの移住民は Siregar/Silo、Saragih などの Simalungun 地域にいた諸族に入った。Indrawarman もジャワ人だけで構成される Damanik、Dirsang、Purba などの新しい一族を作り上げた。〈19〉 Indrawarman 王自身は Siregar/Silo に入った。しかし、九人の息子たちは、Simalungun に存在した他の一族に入るように命令された。Sinaga 一族の人たちは Indrawarman にずっと敵対していた。彼らはトバ湖の際で防御線を張っていた。この地域は Silo 王国のジャワの軍勢がやすやすと征服できる場所ではなかった。

約半世紀後に、Silo 王国を攻撃するためにジャワからマジャパヒトの軍勢が来襲した。Silo 王国は壊滅した。Indrawarman 王は戦いの中で潰えた。Keraksaan、Dolok Sinumbah、Perdagangan と Indrapura は焦土作戦で消えてしまった。Indrawarman の王子たちは無事逃げ出してトバ湖の湖畔にある Haranggaol に避難した。Parlindungan 氏は私に、Indrawarman の子孫の一人である Kaliamsyah 氏が Bogor に住んでおり、Bogor の財務省事務所で働いていると指摘している。Silo 王国に敵対していた Sinaga 一族の人たちは財産を一斉に略奪するためにトバ湖湖畔の居住地から下りて Silo 王国に向かったのであった。

Silo 王国の崩壊後、ジャワの軍勢は Simalungun を後にして Wampu 河口の

Batak/Karo 王国を攻めた。しかし、このジャワの軍勢は Samudera/Pasai の軍勢に反撃されて押し戻された。Silo 王国の跡は Sinaga 一族が居住することになった。彼らは Tanah Jawa 王国という名で新しい王国を建てた。この名を使うに当たり、彼らは自分たちが Indrawarman 王の合法的後継者であると任じていた。

Haranggaol に隠れた Indrawarman の子孫は Dolol Silo と Raya Kahan 王国を Ular 川と Padang 川の上流地域に建てた。Siregar 一族の人々は自分たちを元 Indrawarman 王国の合法的後継者であると自認していた。その結果、Sinaga 一族と対決を続けていた。〈20〉Jawa の軍勢が Simalungung 地域に三度目に侵入した。彼らは Padang 川の河口に上陸し、当時 Pasai サルタン国の支配下にあった Kalipah の港湾を奪った。Jawa の軍勢は Pasai と Solok Silo、Raya Kahaen 王国の連合軍に退けられた。Keraksaan と Solok Sinumbah はそのまま雑林に覆われていたが、Indrapura と Perdagangan は Malay (Malaka) 王の命令で復旧されていた。これが Indrawarman 王によって建国された Silo 王国の民話である。

第三節 Hayam wuruk からマジャパヒト崩壊まで

Hayam Wuruk 王以降のマジャパヒトの諸王の系譜を編集するのは簡単なことではないと序文で触れた。パララトンに盛り込まれた情報はこんがらかり過ぎており、他方 Babad Tanah Jawi と Serat Kanda は信用できない。この件ではナガラクレタガマのみが Hayam Wuruk 王の治世時代の 1365 年までの情報を与えている。保存されている碑文は完璧な情報を与えない。

サカ歴 1279 年 sanga-turangga-paksawani、西暦 1357 年に起きた Pasunda-Bubat の変の後、Hayam Wuruk 王は Bhre Parameswara の王女の Paduka Sori と結婚した。この婚姻から Kusumawardani あるいは bhre Lasem が生まれた。パララトンから、Hayam Wuruk は側室から一人の王女 Bhre Wirabumi を作ったということが推測される。しかし Bhre Wirabumi は側室の子であったため、彼女は王権継承の権利がなかった。王権を継承するのは Kusumawardani であった。これこそが Hayam Wuruk 王が崩御したサカ歴 1311 年、西暦 1389 年、Gajah Mada の 25 年後のマジャパヒト王国の存在を危うくする家族間の争いの原点であった。〈21〉

Kusumawardhani はマジャパヒト王国の高等裁判所長官の Wikramawardhana と結

婚した。Wikramawardhana の名はナガラクレタガマの第 6 節 3 項と第 7 節 4 項に記されている。彼は Bhre Lasem の息子であり、bhre Lasem は王の妹であった。したがって Wikramawardhana は Hayam Wuruk 王の甥ということになる。Wikramawardhana と Kusumawardhani あるいは Nagarawardhani はいとこ同士であった。パラトンによると、Wikramawardhana には「おでぶちゃん」とあだ名がついた bhre Lasem という名の一人の妹がいた。「おでぶちゃん」は Wirabumi に嫁いだ。したがって、Wirabumi は Wikrawardhana の叔父ということになる。これ以外に、bhre Wirabumi は Hayam Wuruk 王の母である bhre Daha の養子になった。Bhre Wirabumi は Blambangan(度欲註:Banyuwangi)付近の王国の東部を支配し、Kusumawardhani と夫はマジャパヒトを支配した。Hayam Wuruk 王の崩御後、Wikramawardhana は Hyang Wisesa を称して行政を掌握したのだった。

サカ歴 1322 年、西暦 1400 年に Wikramawardhana は出家した。マジャパヒトは王女あるいは王の愛妾に統治された。王女あるいは王の愛妾が誰であったかははっきりしていない。これは、Hayam Wuruk 王の王女として確かに王権と王位継承者であると解釈できる Kusumawardhani を意味している。がしかし、これは Kusumawardhani と Wkrawardhana との間にできた Suhita 姫とも解釈できる。西暦 1401 年に Wikrawardhana と bhre Wirabumi との間に抗争が発生した。三年後にマジャパヒトと Blambangan との戦争が終結した。戦争は 1404 年から 1406 年までの二年間にわたった。このマジャパヒト Blambangan 戦争は Paregreg と呼ばれている。この Paregreg 戦争で奇妙な事件が起きたのであった <22>

Wikramawardhana は妾腹から bhre Tumapel と Sri Kertawijaya と名付けられた二人の息子を得た。かれらは妾の子であったので、王権の継承権を有していなかった、王権の継承権を有していたのは Wikramawardhana と Kusumawardhani との間の娘の Dewi Suhita であった。Dewi Suhita は Koripan(度欲註: Kahuripan か?)出身で Pandan Salas の息子の bhre Paramesawara 別名 Haji Ratnapangkaja と結婚した。この Pandan Salas とはいったい誰であったかは後で検証しよう。実際に Wikramawardhana の息子の bhre Tumapel と Wikramawardhana の婿の Hyang Paramesawara はどちら側につくか躊躇していた。たとえば、その当時、マジャパヒトを支配していたのは Dewi Suhita であり、Hyang Parameswara にとって bhre Wirabumi に加担する理由が全くなかった。Wirabumi が負け組に入りそうになった時に Hyang Parameswara が bhre Wirabumi を

援護したため、王が Kusumawardhani であったという疑いが濃くなるのである。bhre Tumapel がマジャパヒト王国の王権の継承権を持っていないことははっきりしていた。Bhre Tumapel と Hyang Parameswara は、マジャパヒトの Wikramawardhana と Blambangan の bhre Wirabumi との間の争い中の人物になってしまった。最終的には Wirabumi が負けた。Bhre Wirabumi は夜間、船で Narapati 女王の王国から逃げ出した。Bhre Wirabumi は捕まって斬首された。その首はマジャパヒトに持ってこられ、Lung に葬られた。その葬祭祠堂は Grisapura と呼ばれている。

Paregreg で bhre Daha は Blambangan からマジャパヒトへ Hyang Wisesa によって護送された。この bhre Daha とは Hayam Wuruk の妹でも bhre Wirabumi の母でもない、というのはこの bhre Daha はとうの昔に亡くなっていたからである。ここで bhre Daha が意味するのは「alem」bhre Lasem から生まれた Wirabumi の息子であり Wikramawardhana の甥のことである。「alem」bhre Lasem は 1400 年の Paregreg の戦いのときにはすでに亡くなっていたと思われる。〈23〉パララトンではこの bhre Daha はサカ歴 1359 年、西暦 1437 年にマジャパヒトの王座にあったと述べている。その四年前の 1433 年には Gajah 王子、別名 bhre Narapati は bhre Wirabumi を殺害したことをとがめられて消されてしまった。ここでいう bhre Daha とは bhre Wirabumi の子孫であることは明確と思われる。

Paregreg の戦いの後、マジャパヒトの行政は Hyang Wisesa Wikramawardhana によってサカ歴 1349 年西暦 1427 年まで続いた。Wikramawardhana の遺体は Lelangon に葬られた。その墓廟は Paramawisesapura と呼ばれた。Prabu stri と呼ばれた Kusumawardhani はサカ歴 1351 年、西暦 1429 年に崩御した。Wikramawardhana の修行が仏教の条件を満足させる 1400 年のたった一年間であったことが極めてはっきりする。1401 年にかれは国家元首に返り咲いた。この間彼は仏教の修行と Kusumawardhani に掌握された国の指導を行ったのであった。

Wikramawardhana が崩御した後、dewi Suhita が女王になった。戴冠は 1427 年であった。Hyang Parameswara との間には子供がなかった。Suhita はサカ歴 1369 年、西暦 1447 年まで統治した。女王の遺体はその一年前に亡くなった Hyang Parameswara と同じ Singalaja に祀られた。この Suhita 女王の統治時代は、スマランの三保洞からの中国の史料が強化している。Gang Eng Tju はマニラから Tuban へ港湾長として移動された。マジャパヒト王室内での種々の奉仕のため、Gang Eng Tju は

Su-king-ta という名の王に arya である a-lu-ya という称号を与えられた。マジャパヒト王は 1427 年から 1447 年まで統治した。この中国語の史料で Su-king-ta 王というのは Suhita 女王であることは間違いない。以上のように bhre Daha がサカ歴 1359 年、西暦 1437 年に統治したのは bhre Wirabumi の子孫からの場つなぎ的なものであったということが明確である。〈24〉この Bhre Daha の統治は長いことは続かなかった。これは Wikramawardhana と Kusumawardhani の子孫に対する bhre Wirabumi 側からの攻撃として解釈すべきである。このことは、Paregreg の戦いで bhre Wirabumi を殺害したかどで Raden Gajah 別名 Bhre Narapati の失脚した事件から明確である。Bhre Narapati の失脚はサカ歴 1355 年、西暦 1433 年であった。

前述のように、Wikramawardhana と側室の間には Bhre Tumapel と Sir Kertawijaya の二人の息子がいた。Hyang Parameswara と Suhita 女王との間には子供がいなかった。それ故、Suhita 女王が西暦 1447 年に崩御した後、bhre Tumapel Sri Kertawijaya が国王に即位した。彼こそが Raden Sanggramawijaya の血を引かない初めてのマジャパヒト王であった。彼は妾腹の Hyang Wisesa 別名 raja Wikramawardhana の息子であった。この Sri Kertawijaya 以降、マジャパヒトの王権はいくつかの家族の間で奪い合うことになった。Sanggramawijaya の直系ではない人たちが構成されているいくつかの家族の間でかわるがわる王位に座ることになった。Sanggramawijaya の血統の人たちによる統治は 1447 年から 1451 年までの Suhita 女王までであった。Sri Kertawijaya はその場所が述べられていない Kertawijayapura に葬られた。

Paregreg の戦い、マジャパヒトと Blambangan との間の戦い、はジャワ人の心に深くしみわたるものである。この Paregreg の戦いをもとにして、後日、小説 Damar Wulan - Minak Jingga が創作された。Damar Wulan の作者は Paregreg の戦いで実際に起きた事件をよく理解してはいなかったが、その事実を含んだ話が出てきているのである。小説 Damar Wulan は Serat Kanda にも記されており、史実のように語られている。その当時、マジャパヒトは Kencana Wungu に統治されていたと語られている。Blambangan の Minak Jingga 王はマジャパヒトの Kencana Wungu 女王に結婚の申し込みを希望していた。このプロポーズは拒否された。〈25〉それ故、Blambangan とマジャパヒトの間で戦になった。Kencana Wungu はクシャトリアの Damar Wulan に援助された。Damar Wulan は Minak Jingga の首を切り落とした。Minak Jingga の首はマジャ

パヒトの Kencana Wungu 女王のもとに届けられた。Damar Wulan は Kencana Wungu と結婚し、Mertawijaya の戒名でマジャパヒトを統治した。これが Damar Wulan の話の抜粋である。Minak Jingga 戸という名が意図しているのは bhre Wirabumi であることは明らかである。Kencana Wungu は Kusumawardhani/Suhita である。Damar Wulan は bhre Paramesawara である。Minak Jingga の首が bhre Parameswara、Gajah 王子別名 bhre Narapati によって切り落とされなかったとしてもである。Bhre Wirabumi の妻は Wahita Pujengan ではなく bhre Lasem “alem” 氏でもない。Damar Wulan の戒名は Mertawijaya である。この小説 Damar Wulan の作者は Suhita 女王の次にマジャパヒトを統治した Sri Kertawijaya の名前と同一視していることは確実である。小説 Damar Wulan の解析は注目を引くものだが、ここではその必要がない。

第四節 宰相の系譜

ここで触れる必要があるのは Gajah Mada 宰相の後のマジャパヒトの諸王を取り巻く大臣たちのことである。既知のとおり、Gajah Mada 宰相はサカ歴 1268 年、西暦 1364 年に死去した。Gajah Mada の死去の報について、それを自分で目撃した作者プラパンチャがナガラクレタガマの第 71 節 1 項に掲載している。それ故この知見は否定できないのである。Gajah Mada の死後、三年間にわたりマジャパヒト王国は空位であった。このパラトロンからの知見はナガラクレタガマの第 71 節の内容と符合している。Hayam Wuruk 王は Gajah Mada の後任を探すために王族から構成される王族会議を招集した。後任者の探す努力は失敗に終わった。とりあえず、Gajah Mada は交代させないことにした。王は大臣を追加した。〈26〉Hayam Wuruk は親政を敷いた。パラトロンによれば、三年間の空位の後に Gajah Enggon が宰相として指名された。Gajah Enggon は Hayam Wuruk の死の 9 年後、サカ歴 1320 年、西暦 1398 年に死去した。Gajah Enggon は 27 年間にわたりその職責にいたということになる。もしこの情報が正しいとするならば、Gajah Enggong はサカ歴 1320 年ではなくサカ歴 1316 年に死去したことになる。Gajah Enggon の後任は Gajah Manguri であった。Gajah Manguri はその職責を四年間務め、その後 Gajah Lembana に交代したのであった。Gajah Lembana はその地位に 12 年間いたことになる。ということは Gajah Lembana の任期はサカ歴 1332 年、西暦 1410 年に終わっていなければならない。パラトロンによると、

Gajah Lembana はサカ歴 1332 年に死去している。この計算はパララトンの記述(31 ページ、16&17 行目、要修正 i çaka kaya-seda-gunaning wong . 1331 ro welas tahun sira Gajah Lembana patih)と符合する。Gajah Lembana の死後、Kanaka がその地位にあった。サカ歴 1335 年に Wikramawardhana の兄弟である Bhre Daha と bhre Mataram が死去した。その当時、Kanaka が三年間宰相の地位にあった。⁹サカ歴 1351 年に Kusukawardhani が死去した。その一年後のサカ歴 1352 年 I paksawihat-gunaning-wong に Kanaka が続いた。サカ歴 1335 年の bhre Daha の死去からサカ歴 1352 年の Kanaka の死去までは 17 年間であった。これこそが 29 行目の意味である。もしそうなら、このパララトンの記述は正しいことになる。この計算はナガラクレタガマの第 71 節 1 項にある Gajah Mada の死去の年をもとに計算したものと符合するのである。

マジャパヒトの法律に掲載されている Kanaka 以降の宰相の名はパララトンにはもう述べられていない。このマジャパヒトの宰相の名も Wikramawardhana/Kusumawardhani の治世までだけであった。このように、マジャパヒトの宰相は次のようにまとめられる。(度欲註:年代は西暦)

宰相氏名	在任期間
Nambi	1294-1316
Halayuda	1316-1323(と思われる)
Arya Tadah	1323-1334
Gajah Mada	1334-1364
三年間空位 (Hayam Wuruk 王親政、崩御 1389 年)	
Gajah Enggon	1367-1394
Gajah Manguri	1394-1398
Gajah Lembana	1398-1410
Tuan Kanaka	1410-1430

(度欲註: 原文では Kanaka が Tanaka になっていた。1972 年の田中角栄のインドネシア訪問が影響しているのかもしれない)

⁹ 19 行目はこのように修正が必要: çaka pawānagni-kaya-bhumi (1335) tigang tahun apatih tuhan Kanaka

第五節 マジャパヒト王の系譜

必要に応じて、マジャパヒトの宰相の問題に触れた後、Hayam Wuruk 王以降のマジャパヒト諸王の問題について話を続けよう。Sri Kertawijaya(度欲註: Hayam Wuruk の娘婿の妾腹の息子)の崩御後、サカ歴 1375 年、西暦 1453 年までマジャパヒトは bhre Pamotan Sang Sinagara の統治下にあった。Sang Sinagara は Sepang に祀られ、bhre Koripan (度欲註:原文の Koripan は Kahuripan ではなかろうか?), bhre Mataram, bhre Pamotan, Bhre Kertabumi の四人の子供を残した。bhre Pamotan Sang Sinagara の崩御後、マジャパヒトの王位は三年間にわたり空位であった。サカ歴 1378 年、西暦 1456 年にになって初めて戒名 Hyang Purwawisesa の bhre Wengker が王位を占めた。マジャパヒトの王位がなぜ三年間空位であったかははっきりしない。Purwawisesa はサカ歴 1388 年、西暦 1466 年まで統治した。同王は Puri に祀られ、その後 Pandang Salas に交替した。二年間統治しただけで Pandan Salas は王宮を後にしたのだった。すなわち Pandan Alas(度欲註:原文の Pandan Alas は Pandan Salas ではなかろうか?)は 1466-1468 年の統治期間であった。Pandan Alas は Raden Sotor と名付けられた bhre Tumapel の子孫である。若かりしときは Koripan の首相になり、その後 Daha に、最後はマジャパヒトに移った。Raden Sotor には Raden Sumirat という名の息子がいた。この Raden Sumirat は Hayam Wuruk の姪である bhre Kahuripan と名付けられた Wikramawardhana の妹と結婚した。この Raden Sumirat こそが最初の Pandan Salas 一世になった人である。彼はサカ歴 1352 年、西暦 1430 年に死去した。上記のように、マジャパヒト王になった bhre Pandan Salas の統治期間は二年間であり、その後宮廷から逃げ出したのは Pandan Salas 三世である。マジャパヒトからの逃亡はサカ歴 1390 年、西暦 1468 年のことであった。

Pandan Salas 三世の代わりにだれがマジャパヒトの王になったかはパララトンでは語られていない。サカ歴 1408 年に発出された Jiyu 碑文(O.J.O. XCII 参照)にその名を発見することができた。この碑文は Singawardhana 王が Bhrahmaraja Ganggadhara へ褒美として土地を与える決意を述べている。サカ歴 1408 年、西暦 1486 年に Sri Girindrawardhana が Wilwatika、Daha、Janggala Kediri の王になった。その年に Sri Girindrawardhana が Singawardhana 王崩御 12 年の記念するための Srada の宴を準

備しつつあった。この機会は Trailokyapuri の土地を Sri Bhrahmaraja Ganggadhara に与えた決意を示す石碑を発出するのに利用された。上記のように、Singawardhana はサカ歴 1408-1412 年すなわち西暦 1496 年に崩御した。(度欲註:原文では 1396 となっている)サカ歴 1390 年に王宮から逃亡した bhre Pandan Salas に関するパラトンからの知見とこの年代とが関係しているとする、Singawardhana がマジャパヒトを統治したのはサカ歴 1390 年から 1396 年、西暦 1468 年から 1474 年であったという結論を得ることができる。

Singawardhana の後マジャパヒトを統治したのは bhre Pamotan Sang Sinagara の息子の bhre Kertabhumi であった。Kertabhumi は町で死んだ王の叔父であることをはっきりと述べている。〈29〉このように、町で死んだ王を意味しているのは Singawardhani であると確定することができる。Kertabhumi は符牒では *cunja-nora-yuganing-wong* のサカ歴 1400 年、西暦 1478 年まで統治した。*sirna-ilang-kertining-bumi* (サカ歴 1400 年)の Demak 軍の最後の攻撃の影響でマジャパヒト王国が消滅したことを語るために Serat Kanda で符牒として Kertabhumi 名が利用されている。スマランの三保洞に保存されていた中国語史料でも、最後のマジャパヒト王で Demak 軍に捕虜にされたのは Kin-ta-bumi であると述べられている。上述のように、現時点では確かに bhre Kertabhumi がマジャパヒトの最後の王であると決定づけられる。

サカ歴 1400 年、西暦 1478 年以降、マジャパヒトは Panembahan Jimbun, 別名 Raden Patah である Demak のサルタンの支配下におちた。1478 年以降の時期は Demak サルタン国の属国としてマジャパヒト王国の「その後」の時代である。この「その後」の時代に、Panembahan Jimbun に取り立てられたマジャパヒトの二人の実業家の名前が知られている。最初の実業家とは Nyoo Lay Wa という華僑である。マジャパヒトが Demak サルタン国によって倒された後 Panembahan Jimbun 別名 Raden Patah は Nyoo Lay Wa を実業家として取り上げた。1478 年以降マジャパヒトは華僑商人に支配されていたといえる。Demak サルタン国の Panembahan Jimbun 別名 Al-Fatah (征服者の意味)は Kertabhumi 王の子で華人女性から生まれた中国人の末裔であった。第三章の「人物の特定と歴史の進行」でわかるように、Jin Bun は Arya Damar 別名 Swan Lion、パレンバンの中華商館長、に育てられた、Wikramawardhana 王の華人女性から生まれた息子であった。Nyoo の統治期間はたったの八年間だけ

であった。元マジャパヒトの人たちは恨みや敗戦に復讐するためにあちこちで反乱を起こした。Nyoo は西暦 1486 年に殺されてしまった。

Panembahan Jimbun は、マジャパヒトの人たちが華人実業家の支配を快く思っていないことに気が付いた。Nyoo の殺害の後 1486 年に Jimbun は Singawardhana 王の子孫で Kertbhumi 王の甥であり戒名を Girindrawardhana という Dyah Ranawaijaya を新しい実業家として取り上げた。ここで、新しい実業家 Girindrawardhana とは Jim Bun の義理の兄弟であった。Girindrawardhana は 1572 年まで 40 年間にわたって統治した。Girindrawardhana は交易と支配権の争奪の競争で Demak サルタン国の敵となっていたマラッカのポルトガル人たちとの関係があったため、Trenggana のサルタン別名 Tung Ka Lo の息子 Toh A Bo に率いられた Demak 軍にマジャパヒトは二回も攻撃されたのだった。同年に Girindrawardhana は崩御した。彼の息子と娘たちは Demak サルタン国への服従を嫌い、イスラムへの改宗を嫌った。Panarukan は公式には一度も Demak の支配を受けたことのない土地であったので、彼らは Panarukan に避難した。かつては栄華を極めた王国としてのみならず Demak の属国としてのマジャパヒトはここでついでたのであった。Demak 軍のマジャパヒトへの侵攻は、Demak 軍が Pajajaran の Baduga 王を屈服させポルトガル人たちを Sunda Kelapa 港から追い払った一年後の 1527 年に起きたのだった。

マジャパヒトの「その後」の時代に関する記事はスマランの三保洞廟からの中国語時代史に記録されており、極秘にされオランダ政府に提出された地方行政管理官 Poortman の報告書の序文に盛り込まれている。この件に関しては第二章にあるスマランの三保洞からの中国時代史を参照のこと。

実業家 Nyoo のマジャパヒトの統治に関して、Babad Tanah Jawi と Serat Kanda では一度も述べられておらず、かつどこの歴史書でも語られたことがない。この件はスマランの三保洞の中国史書に盛り込まれており、極秘にされオランダ政府に提出された地方行政管理官 Poortman の報告書の序文に盛り込まれている。Nyoo は一度も碑文を発出したことがなかった。マジャパヒトの「その後」の時代における碑文とはサカ歴 1408 年(度欲註:原文では 1468 年)に Girindrawardhana によって発出された Jiyu 碑文である。Jiyu 碑文の研究中、Panembahan Jimbun が奪ったこのマジャパヒト王国のあとおきたのはなんであったかという疑問が湧いてきた。いくつかの碑文を研究し

てみるだけで、Wilatikta, Daha, Jenggala, Kediri の王であると自称した Dyah Ranawijaya 別名 Girindrawardhana は 1478 年以降のマジャパヒト崩壊後のマジャパヒト王であるという結論に至った。一方、スマランの三保洞廟の中国の年代史は Kertabhumi 王と Girindrawardhana の統治の間にマジャパヒトの人たちに殺された華人実業家の Nyoo 統治が存在したという説明を与えている。それ故、なぜ Dyah Ranawijaya が 1468 年に Jiyu 碑文を発出し、同時に Singawardhana 王死後 12 年を記念して Srada の宴を催したかがはっきりする。この碑文は Trailpkyapuri の土地を Singawardhana 王の褒美として Sri Bhrahmaraja Ganggadhara に与えた証拠になっている。

Jiyu 碑文に記された以外に Girindrawardhana の名はスマランの中国年代史に述べられている。この年代史の中でマジャパヒト王 Pa Bu Ta La が Demak のサルタンに税金を払わなければならなかったと述べている。この Pa Bu Ta La の名は Wiltikta, Daha, Jenggala, Kediri の王の Sri Girindrawardhana と一致することは明らかである。Dra の音節は ta-la に変換されている。Jiyu 碑文でも Sri Girindrawardhana は Natha 王を称号し本名は Ranawijaya であると述べている。Pa Bu Ta La が意味するのは、1486 年にマジャパヒトの支配者となった Sri Girindrawardhana であることは極めて明白である。

ここでマジャパヒトを統治した諸王の系譜が完成した。Hayam Wuruk 王以降のマジャパヒト諸王の名前をそれ以前の諸王の系譜と合わせると、Dyah Sanggramawijaya から Kertabhumi の西暦 1294 年から 1478 年までの 184 年間にわたる諸王の完全な系図を得ることができた。〈32〉Sanggramawijaya は 1447 年の Suhita 女王までの 153 年間にわたりその直系の子孫が統治した。その後、マジャパヒトを統治した諸王は直系の子孫ではなく王族の家系の出身で、しょっちゅう変わった。40 年間にわたり、マジャパヒト王国の支配権と王権争いとは起こった。マジャパヒト魂は内部から腐敗し、1478 年にまだ新鮮な Damak からのイスラム精神に倒されてしまったのであった。

マジャパヒトが Demak の支配に屈した後、マジャパヒトは Demak の属国となった。Demak の属国として、1527 年まで持ちこたえた。この「その後」の時代で、Nyoo と Girindrawardhana の二人の実業家(度欲註:支配者)、Nyoo は 1468 年まで、Girindrawardhana は 1468 年から 1527 年まで統治した、の名前が知られるのである。

上記のように、13 人の王と「その後」の時代における二人の実業家の名前が知られる。マジャパヒトは 1294 年から 1527 年までの 233 年間、184 年間は独立国として 49 年間は属国として持ちこたえたのであった。

第六節 マジャパヒト王一覧表

代	名 前	統治期間
1.	Kertarajsasa Jayawardhana (Sanggramawijaya: Raden Wijaya)	1294-1309
2.	Jayanagara (Kala Gemet: Wirandagopala)	1309-1328
3.	Tribuwanatunggadewi (Jayawisnuwardhani)	1328-
4.	Rajasanegara (Hayum Wuruk)	-1389
5.	Wikramawardhana (Hyang Wisesa: Kusumawardhani の夫)	1389-1427
6.	Suhita	1427-1447
7.	Bhre Daha (間つなぎ政権)	1437-
8.	Sri Kertawijaya	1447-1451
9.	Bhre Pamotan (Sang Sinagara)	1451-1453
三年間空位		
10.	HyangPurwawisesa	1456-1466
11.	Bhre Pandan Alas	1466-1468
12.	Singawardhana	1468-1474
13.	Kertabhumi	1474-1478

14.	Nyoo Lay Wa	1478-1486
15.	Girindrawardhana (Dyah Ranawijaya: Prab Nata)	1486-1527

〈33〉上記のマジャパヒト王の名の表は学問上において責任を取ることが可能である。上記の名前はナガラクレタガマやパララトン、Lidung Wijayakrama、マジャパヒト時代の各種の碑文とスマランの三保洞からの年代記など信用に足る史料から作ったものである。王名のみならず統治期間についても詳細に調べた結果である。宰相の名前の一覧表も同様である。上表のマジャパヒトの王の名と宰相の名が Serat Kanda と Babad Tanah Jawi をもとに作られたものとは異なる。上記の研究結果は後世の研究のための手がかりとなりうるものである。

訳出終了 2015/8/6

